

未来型実験集合住宅「NEXT21」における個性的生活創造に関する

調査

はじめに

環境と豊かさの調和をメインテーマとした、未来型実験集合住宅「NEXT21」。特に豊かさの面では、「心の豊かさ、個性的な生活と住まい」を追求した。大阪ガスでは、1968年東豊中に実験住宅をつくったが、そのコンセプトが「広さの確保と快適・便利な生活」であった。それらがある程度満たされた今日では、さらにライフスタイルや価値観の多様化、家族構成や年齢の変化にともなうニーズへの対応が必要になる。

NEXT21では、2段階供給システムにより、集合住宅の中でフレキシブルに変化する住戸を実現させ、住まい手参加設計住戸4住戸とライフスタイル提案住戸12住戸での居住実験を行った。ここではその実例をいくつか紹介しながら、個性的な生活創造のあり方について考えていきたい。

1. 設計参加により夢を実現する ＜ハーモニーの家（403住戸）＞

住まい手参加設計住戸として、「ハーモニーの家」（403住戸）を紹介しよう。

住まい手は、会社員である夫、家事に専念する妻、設計相談後生まれた長女、入居3年目に生まれた次女と、家族構成が変化している。

この夫妻の共通の趣味は合唱。特に夫は友人と8人で合唱のダブルカルテットを組み、国際的な合唱コンクールで受賞するほどの実力の持ち主で、コンサート活動も活発に行っている。「合唱の練習を自宅で行いたい」「ゆったりと音楽を楽しむ時間・空間が欲しい」等の徹底的に趣味にこだわった要望が、住まい手が設計に参加することで実現した。広いリビングルームは合唱練習室を兼ね、外部に音を漏らさないよう遮音をもたせてある。また、キッチンやサニタリーにもスピーカーが埋め込まれている。

入居後は、まさに夢が実現した生活であった。リビングは、ふだんは家族でのんびりくつろぐ場であるが、週末は合唱の練習スタジオ及び合唱仲間との交流の場へと変身した。「非常に充実した練習ができる。この家でもっとも豊かさを感じるのは、自宅で仲間と合唱の練習ができることだ。」と

ご主人は断言。一人で発声の練習をすることもあり、歌の趣味にかける時間は、入居前より長くなっている。円弧を描いた壁は、吸音と音の跳ね返りを防ぐ目的を達しており、ホールのような音の響きを実現させた。空間的にも、広がりと柔らかさを感じさせる。ただ、家の中（他の部屋）に対する遮音性はあまりなく、音が筒抜けだったのが難点であった。

クリスマスには、2階のホールで、「サロンコンサート」を催し、メンバーの友人やNEXT21の入居者あわせて50人近くが音楽を楽しんだ。練習成果のお披露目にもなり隣近所の方々からも喜んでもらえる、このような「場」の実現は、NEXT21の交流の幅を広げた。

この声楽カルテットの練習は、入居後5年間ずっと続いた。NEXT21が都心にあるという立地のよさも手伝ったのであろう。メンバー各々の事情（子どもの成長など）に応じて、練習の曜日や時間帯などを工夫して変えつつも確実に頻度を減らすことなく継続し、夫は5年間を通じて大満足であったという。

お料理好きな奥様は、この声楽カルテットのメンバーをはじめ、来客へのもてなしにこだわりを持ち、工夫して楽しんでいた。対面式キッチンや、台所奥の食品庫・戸棚などが非常に便利だという。広い台所空間では、来客も一緒に食事の準備や後片付けができる楽しさがあり、もてなされる方も気兼ねなく自然にくつろげる雰囲気がある。設置されたスピーカーから音楽が流れることもしばしば。夜はお風呂内と同時に流れていることもよくあったそうだ。

小さな装飾品なども含め、総じてこの家は、音楽で満たされている喜びがさりげなく表現されている。訪問客があると、季節や気分に応じたバックミュージックで歓迎し、ミュージシャン人形が出迎える。飾ってある油絵にも楽器が描かれ、娘さんのくつ下も音符の模様。これらは、一家のアイデンティティ確認になっている。

図403 平面図
写真 練習場を兼ねるリビング
音楽を思わせる装飾（3枚）

住まい手が設計に参加することで、そのこだわりを徹底的に実現することも可能になり、大きな満足感を得ている。一方、これは総じて住まい手参加設計の家に言えることだが、家族構成の変化（子どもの誕生と成長）生活時間や内容の変化までは予想がつかず、当初の予定と違った部屋の使い方をし、不便さを感じていることも多い。たとえば、この403住戸であれば、もともとはご主人の母親が遊びに来た時のためにしつらえた部屋が子ども部屋になり、和室が、子どもといっしょに家族全員で寝る部屋となった。当初、夫婦の寝室であった部屋（ベッドルーム）は来客用になったという。「小さい子どもは和室が一番」と奥様。「設計時は子どもができた状況まで全く考えていなかった」と言っていた。このような声は、同じく住まい手参加設計で、子どもが増えた302住戸「ヤングファミリーの家」でも聞かれ、子どものためには和室空間が便利だと話していた。

NEXT21の住まい手参加設計住戸では、住まい手の個性やこだわりを実現させるのには、成功したと言える。今後残された課題は、ライフステージ・家族構成の変化へいかに対応するか、という点であろう。

2. ライフスタイル提案住戸を住みこなす

住まい手は、当初、提案されたライフスタイルコンセプトと大まかな間取りだけを見て、入居希望を出した。そのため、建築家の冒険や遊び心が自由に反映された斬新な住空間を見て、「イメージしていたものと違う」「こんな家に本当に住むのか」と戸惑う人も少なくなかった。

しかし実際入居後は、提案されたライフスタイルや空間に刺激を受けながらも、住まい手が独自の住まい方を新たに創出していく事例がいくつも見られた。ここでは、提案されたライフスタイルや空間が、実際生活に適合した例を紹介しよう。

<ホームパーティーの家（502住戸）>

この住戸は、友人との交流を楽しむ家族が、気軽にホームパーティーを開ける空間を中心に提案されている。メゾネットになっており、1階がパーティスペース。華やかなブルーを基調にして、リビング・キッチン・アトリウムがひと続きになっている。ジャグジーやプールバスも完備。「狭い日常生活の殻を打ち破るカーニバル空間としての交

流スペース」というコンセプトであり、パーティスペースにもなるリビングは、深い青色を基調としたおしゃれなデザインで、キッチンも含めて広い空間になっている。2階は家族のプライベートスペースで、寝室・サニタリー・バスルームが配置されている。

住まい手は、会社員である夫（入居時35歳）パートで働く妻（同33歳）、小学生の娘2人（同9歳、6歳）の4人家族である。このご夫婦は、入居前から人とのかかわりを大切に考え、友人や会社仲間を家に招いていた。

NEXT21入居後約1～2年間で、来客の頻度や顔ぶれが増え、知らない人同士が顔をあわせることもあった。海や山に仲間と遊びに行った帰りにこの住戸に立ち寄るケースが増え、夏は海でとれた魚をあてにビールを、冬は焼き肉や鍋などをメニューにして週に1度は夜の飲食をともなう。最高20人のパーティをしたこともある。また、メゾネットであることが、非常に便利であった。パーティの間子どもは2階やプールなどで遊ぶので、大人が1階のパーティ空間でゆっくり会話を楽しめるからだ。キッチンの広さも評価が高く、夫の家事参加が増え、来客もパーティの準備・片づけを手伝いやすいという。

入居時には「ショールームのようだ」と不安に思っていたリビング空間について、「慣れると逆に、深い海の底にいるようで、非常に落ち着く」と言っている。この家では、ホームパーティが日常的に行われているため、リビングを兼ねたパーティールームには、「カーニバル空間」としての非日常的な雰囲気は必要なかったのかもしれない。ただ実際には、カーテンもブルー系を選び、インテリアや額絵も、イメージにあわせて「おしゃれな空間」づくりを試みている。マンボウを型どった風船（ヘリウムガスが入っているためふわふわと部屋を泳ぐ）も、海を意識したものである。このように、特に入居当初は、装飾や演出にはかなりこだわって楽しんでいただこうだ。

3年目になると、生活に変化が出てきた。子どもの成長にともない、大人同士での外出・外食が増え、子ども連れで友人が来ることも減り、総じて来客・パーティを行う頻度が減った。リビングは、お気に入りのジグゾーパズル（やはり、海の絵柄）が台所から移動してテレビ横におかれたり、それまでリビングの壁にかけられていたお面が、子どもがこわがるという理由で台所などに移されたり、あるいは、1階のプールのガラス壁に子ども

もがシールを貼り付けたりと、家族、特に子どもがここで過ごすことが増えたことがうかがえる。

4．5年目になると来客は（子どもや夫婦の友人家族など）週に1～2度程度に増えホームパーティーも行っているが、リビングにはリクライニングの大きな椅子が置かれ、来客の荷物置きになっていた小さな椅子も、部屋を広く使うために他の部屋に移すなど、より家族がくつろげる空間へと変化していた。

ご夫婦は、5年間の体験を通して、贅沢な空間で生活を楽しめたと喜ぶ一方、「リビングのブルーの壁の色は、ずっとくつろぐには濃すぎる」「メゾネットよりは1フロアの方がいい（子どもが一人で上の部屋に居るのを嫌がった）」と感想を述べている。パーティーの持ち方について、当初の建築家の意図とは違う価値観を持つ家族であったが、斬新な空間提案から刺激を受け、そのおしゃれなデザインに誇りを持ちながら工夫している。それが、接客行動を促進させていたのかもしれない。

一方、来客・パーティーより家族のくつろぎが中心になってくると、コンセプトに捕らわれず、非日常空間を日常空間へと新たに作り変えていった。ただ、だからといってパーティーが開きにくくなったことはないようだ。斬新なデザインには、「おしゃれな空間を楽しむ」面と、「くつろぎには最適であるとはいえない」面とがあったが、広いリビングやキッチンをはじめとする一階のゆとりある空間は、「家族のくつろぎの間」と、「気楽なパーティーの間」と、どちらにも適したと言える。それは、この家族が、交流を重んじたり家族のくつろぎを重んじたりしながら、思い切り生活を楽しんでいたことから言えるだろう。

写真 リビング（入居1年目）

写真 海やリゾートを連想させる絵画

が増えたくつろぎのリビング（入居3年目）

3．自己表現の舞台である住まい

本来住まいは、住まい手の自己表現の舞台であり、小さな装飾によっても、家族のアイデンティティを確認できる「場」である。それが、NEXT21でも各住戸で顕著に見られた。

若い夫婦の住戸には、2人の記念写真が飾っており、新婚旅行のお土産が置いてあったりする。

家族の写真や子どもの作品、趣味の道具（釣り道具やテニスラケットなど）、絵画、ドライフラワー、盆栽等々。そんなモノを飾ることで、家族同士、体験や思い出を忘れず共有でき、来客にもさりげなくアピールできる。家族が創作した作品であれば、まさに自分の住戸が展示会場・ギャラリーとなる。このように、住まいはのびのびとした個性を發揮できる「場」としての可能性がある。提案住戸の場合は、この表現の余地（モノを飾ることで楽しむか、モノを置かないことですっきり住むかの選択の可能性）を空間的にもデザイン的にも十分に持っていることが望ましいだろう。

写真 住まい手の自己表現

4．こだわりと空間のあり方 ～感動と不快感～

理想的な住まいとは？「快適便利な住まい」から、个性的で多様な生活というドラマの「舞台としての住まい」へと、住まい像が変わり始めている。个性的な住まいをつくるには、「快適さ」の意味が問題になってくる。

NEXT21でも、个性的な生活の実現に向けて、さまざまなライフスタイルコンセプトと空間の提案を行ってきたが、個性を重んじた斬新な提案がされるほど、不快を感じる部分が浮上してきたことは否めない。「こだわりの空間」「感動的な空間」は一歩間違えると、不快な空間になってしまう。特にライフスタイル提案住戸の場合は、この折り合いの難しさが表面化した。こだわりや感動には、個人差が大きいからである。

たとえば301住戸「ガーデンハウス」の場合。室内に植栽を取り入れ、自然と共に暮らすというコンセプトであったが、実際入居者は、植栽の成長を家族で共有し子どもも自然に興味をさらに深めたのでいい体験になったと話している。面倒な水やりも積極的に行っており、予想外の虫の大量発生にはかなり閉口したものの、苦労や我慢を重ねながら植物との生活を楽しんでいた。メゾネットの空間的ゆとりがある中での開放的な生活であったことが、精神的にゆとりを与えたとも言える。ただ、どの家族でも住める住戸ではない。自然とふれあうことにこだわりを強く持つこの家族であったから、満足度も高かったと言える。

写真 ガーデンハウス

303 住戸「自立家族の家」においては、個のプライバシーを尊重しながら家族のつながりとの両立をはかる空間の提案がなされたが、コンセプトに対する深い理解と、家族の積極的な協力があればこそ、「個」としての自立と家族のコミュニケーション双方が育まれるという結果となった。逆に、使い勝手や空間の広さ、住み心地など、家具の配置替えや装飾の変化など多少の工夫をしても快適さが得られず、収納の少なさや個室の狭さ、正面玄関のない不便さ、来客時に適当な空間がないこと等、解消しきれない不満の多さが目立った。

写真 自立家族の家

501 住戸の「フィットネスルームのある家」。室内で運動ができるような可変性のある空間をもつ家。収納空間の少なさや間取りの関係で、入り口近くにすぐ食器棚を置き、たんすや収納ボックスもジム空間に置かざるを得なかったため、本当に置きたいスポーツ器具が置けなくなり可動床も固定されてしまった。入居年月が経つにつれて、子どもが生まれ成長する中で、あらゆるモノがリビングに置かれ、フィットネスを十分楽しめるほど空間に余裕がなくなった。住まい手にとっては、中途半端でけっして快適ではなかったようだ。

写真 フィットネスルームのある家

601 住戸「創時間の家」。高機能・多機能機器によって家事時間を短縮し、合理的に快適に住まうというコンセプトであった。特にキッチンタワーが象徴的で、可能な限り機能を盛り込んであるが、実際にモコン調理・クッキングコンピューターなど使わない機能は5年間必要なままであった。作動ボタンが多いわりには細かい調整ができず不便で、特に入居当初は悪戦苦闘しストレスさえ感じている。結果、調理メニューも時間も入居前とあまり変わらず、調理の楽しさも同じだという。単機能の調理器具で手作り料理を試みる方が楽しいのかもしれない。その他おせっかいな機能もあり、例えば、電動カーテンのスイッチもいちいち押しにいくのが面倒だという。

機能については、使用者や住戸に応じてもっと

柔軟な考え方がされるべきである。高機密高断熱住宅に対応した24時間空調についても、実際1日中締め切っているという入居者は少なく「窓をあけて、自然の風や光を取り入れたい」という意見も多かった。不快感をゼロにして、省エネルギーや省時間を目指す効率的な生活を好む人もいる一方で、少し位の暑さや寒さがあっても、外気に触れながら四季を感じるような、また手作り感覚の生活を見直したいという考えの人もいる。高機能多機能であるほど便利で良い、と過信する時代はすでに終わったことを、今回再確認できた。

感動や快適さに対する価値観は、家族によってあるいはその時の家族構成によってかなり違ってくる。だからこそ、こだわりを生かせる「舞台としての住まい」を実現させたい。「不快でないだけの空間である住まい」は充足している。今後、“住まい手が主役として感動できる住まいを実現する”という難題を克服するために、このNEXT21の事例は有効に生かされるべきだろう。